

SNS 使用態度に関する尺度の構成 (1)

川上 正浩

臨床心理学専攻教授

要約

本研究では高校生、大学生を対象に、SNS 使用態度について測定が可能となる包括的な尺度を作成することを目的とした。このため、複数の SNS 使用に関連する尺度項目を参照、修正、統合したうえで、72 項目からなる質問紙が作成された。高校生、大学生、大学院生の男女、計 190 名を対象にデータが収集された。因子分析の結果、「ネガティブ表出」、「依存的使用」、「対比ネガティブ」、「賞賛希求」、「拒否不安」、「暴露不安」、「ハードルの低さ」、「継続義務感」、「炎上容認」、「情報共有」の 10 因子が抽出され、これらに対応する下位尺度を構成する全 53 項目からなる SNS 使用態度尺度が提案された。

キーワード：SNS、測定尺度、高校生、大学生

I 問題と目的

2010 年代に多数のソーシャルメディアが生まれて以降、フェイス・トゥ・フェイスの対面形式でない、オンライン上でのコミュニケーションの重要度は一気に増加してきた (正木, 2019)。インターネット上でのソーシャル・ネットワーキング・サービス (Social Networking Service)、いわゆる SNS の利用が一般的になり、従来の我々のコミュニケーションそのものが部分的に SNS 上に移行する一方で、新たな形態・内容のコミュニケーションも発生、普及しつつある。こうした社会的なコミュニケーションの変容を受け、心理学的な研究に関しても、たとえば承認欲求と SNS 利用の関係について (正木, 2018) や心理的居場所 (川原, 2020; 諸井ら, 2018; 須藤, 2019; 鈴木ら, 2022) との関連、孤独感 (平木・宮崎, 2020)、印象形成 (下田・笠置, 2021)、幸福感 (藤井, 2021)、人生満足度 (黒澤・田口, 2020)、自己概念 (宮代, 2019)、自己開示 (西村, 2020) といった様々な視点から行われてきている。

また、SNS を含めた「インターネット」の使用については、耐性 (tolerance)、重要視 (salience)、気分の変化 (mood modification)、引きこもり

(withdrawal)、葛藤 (conflict)、再発 (relapse) といった、薬物依存に近い次元 (dimension) が含まれていると Griffiths (2005) が指摘するように、依存の観点からの研究も多く見られる (たとえば宮城ら, 2020)。こうしたインターネット依存に関しては、SNS に対する依存やゲーム依存、動画閲覧を常態的に行うなど、様々な使用の仕方を含んでいると考えられる。そこで本研究では、SNS を Twitter, Instagram, LINE 等と定義したうえで、SNS の使用に対する態度について独立に測定することを意図した尺度を構成することを目的とする。このため、現在参照できる複数の尺度について、表記の統制や項目の修正、因子分析を経て、包括的な SNS 使用態度尺度を構成する。

II 方法

調査時期

調査は 2022 年 8 月から 2023 年 1 月にかけて実施された。

調査対象者

近畿圏・中部圏の大学、女子大学に所属する大学生 136 名 (男性 28 名、女性 108 名、平均年齢

19.7歳, $SD=3.47$), 近畿圏の大学院に所属する大学院生8名(男性4名, 女性4名, 平均年齢23.9歳, $SD=2.70$), 近畿圏の女子高校に所属する高校生46名(平均年齢17.3歳, $SD=0.53$)の, 計190名が調査に参加した。

質問紙の構成

複数のSNSに関わる態度, 行動に関する尺度を組み合わせ, さらにそれらで使用されている項目を, 単独の項目として見ても, それが「SNS」に対する質問項目であることが理解可能であるように, かつ, ダブルバーレル質問とならないように配慮しながら, 表現あるいは表記の修正統一を行った。そのうえで, これらの中の類似した項目や, 不適切と判断される項目を吟味, 削除して, 最終的に72項目からなるSNS使用態度測定尺度を作成した。これら72項目のいずれかの先行研究に該当する尺度について以下に列挙する。

たとえば, 藤・吉田(2009)のインターネット上での行動内容については, 「自己演出」, 「自己開示」, 「自己客観視」の3因子からなる「自己の表出に関する行動」, 「所属感獲得」, 「対人関係拡張」, 「攻撃的言動」の3因子からなる「他者との関係に関する行動」, 「攻撃的言動」, 「没入的関与」, 「依存的関与」, 「非日常的関与」の4因子からなる「現実とのバランスに関する行動」の, 3つの行動内容を測定するものである。石川(2019)の現実のコミュニケーション行動尺度は, 「慎重性」, 「積極的連携」, 「調和性」の3つの下位尺度からなる尺度である。能仁ら(2022)のSNS利用行動尺度は, 「アピール・反応への囚われ」, 「投稿」, 「ストレス解消・暇つぶし」, 「知識やアイデアの獲得」, 「気遣い」の5つの下位尺度からなる尺度である。

岡安(2016)のインターネット利用行動(尺度)は, 「朝起きるとすぐにメールなどをチェックする」などの18項目が使用されていた。高橋・伊藤(2016)のSNS利用時の行動尺度は, 「一般的積極利用」, 「自己アピール」, 「敏感即応」, 「スルースキル」, 「表現法配慮」の5因子からなる尺度である。都筑ら(2019)は, 独自に作成した

「反応がよかった投稿について, 何度も読み返す」, 「反応が悪かった投稿については, 投稿したことを非常に後悔する」の2項目で, SNSの投稿についての態度を測定している。黄ら(2017)のソーシャルメディアの利用動機尺度は, 総務省情報通信政策研究所の調査で使われた項目を元に大学生用に作成され, 因子分析の結果, 「他者と気持ち共有するため」, 「リラックスとストレス解消」, 「暇つぶし」, 「情報収集のため」, 「現実生活の通信道具として」の5因子が抽出された。柏原(2011)のTwitter利用動機尺度は, 「交流/自己表現動機」, 「既存関係維持動機」, 「実況/情報探索動機」, 「自己呈示動機」, 「気晴らし動機」の5因子から構成される尺度である。ただし, 柏原(2011)は, この因子分析の過程で, 「おもしろいから」, 「暇つぶしになるから」という2つの項目が除外されていることについて注目している。

松浦ら(2020)のSNS効用認知尺度は, 五十嵐・吉田(2003)を参考に, 「SNSの親和充足」, 「SNSの利便性」, 「SNSの束縛感・不快感」の3因子から構成される尺度である。西村(2017)のプライバシー懸念・LINEの効用認知尺度は, 「インターネットにおけるプライバシー懸念尺度」, 「LINEの効用認知尺度」の2つの下位尺度からなる。大野(2019)のSNS利用動機尺度は, 「逃避」, 「優越感・評価の獲得」, 「日常の関係維持」, 「愚痴・相談」, 「共感の獲得」の5つの下位尺度からなる尺度である。

菱山(2009)が項目反応理論を用いて分析し, 橋本・山田(2020)が α 係数の算出により信頼性を確認したインターネット依存傾向尺度は, 「インターネットを使用できない状態が続いても, 不安にならない(逆転)」などの48項目からなる単次元尺度であった。久保ら(2015)のSNS依存尺度は, 「情緒的利用」, 「過度の利用」の2因子からなる尺度である。黒川ら(2020)の高校生用スマートフォン利用によるインターネット依存傾向測定尺度は, 「情緒」, 「統制不全」の2因子からなる尺度である。松島ら(2017)の大学生版スマートフォン依存傾向尺度は, 「時間浪費」,

「携帯利用できないことへの不安」、「日常への侵入性」、「自己像の揺らぎ」の4つの因子からなる尺度である。申・潮村（2019）の SNS 依存（「他にしなければならぬことがある」といった Twitter/LINE を見てしまうことがある」など）および SNS の使用認知（「Twitter/LINE 上では、面と向かって話しにくい相手ともやり取りしやすい」など）尺度は、それぞれ因子分析により一因子性が確認された尺度である。戸田ら（2015）の新しいスマートフォン依存尺度は、「ネットコミュニケーションへの没頭」、「スマホの優先」、「マナーの軽視」、「ながらスマホ」、「長時間の通話」の5因子からなる尺度である。鶴田ら（2014）の高校生向けインターネット依存傾向測定尺度は、「精神的依存状態」、「メール不安」、「長時間利用」、「ながら利用」、「対面コミュニケーション不安」の5因子からなる尺度である。

前田（2021）（森・名取，2018）の能動的 SNS 疲れ尺度は、「注目獲得」、「自己抑制」、「嫌われ回避」の3因子、受動的 SNS 疲れ尺度は、「劣等感」、「義務感」、「情緒不安定」の3因子からなる尺度である。森ら（2014）の受動的 SNS ストレスイベント尺度は、「動向懸念」、「ネガティブ感情」の2因子からなる尺度である。岡本（2017）の SNS ストレス尺度は、「投稿拡散不安ストレス」、「閲覧強要ストレス」、「社会的比較ストレス」、「友だち申請の拒絶ストレス」、「SNS と現実のギャップストレス」、「過剰な繋がりストレス」、「背伸びストレス」の7因子構造をもつ尺度である。

藤井ら（2013）の NTBS（Twitter の不適切な投稿）尺度は、「自己アピール」、「コミュニケーション」、「リツイート」の3因子からなる尺度である。濱口・金子（2021）のサイバーアグレッション尺度（cyber aggression scale: CAS）は、海外で開発された既存の CA の尺度（Lee, Abell, & Holmes, 2015; Runions et al., 2017; Shapka & Maghsoudi, 2017）を参考に作成された SNS や e メール上での攻撃的コミュニケーションの項目と、虚勢的自己呈示（國吉，2017）、自己高揚的な自己呈示（谷口・清水，2017）から構成され

た尺度である。調査の結果、天井効果、床効果が疑われる項目を除外し、残った10項目（「怒りの発信」2項目、「他者に関する否定的な情報の発信」2項目、「自己高揚的自己呈示」3項目、「逸脱した使用法」3項目）に対して、因子分析が実施された結果、「怒りの発信」、「自己顕示」の2因子が抽出された。本研究では、濱口・金子（2021）が当初作成した全31項目が検討の対象とされた。小坂（2016）の過度のインターネット利用尺度は、「動画共有サイト・オンラインゲーム参加」、「SNS 閲覧」、「コンテンツ接触」の3因子から構成される尺度である。増井ら（2019）の日本語版ネット荒らし尺度は、Buckels et al.（2014）が、ネット荒らしを測定するための尺度として構成した、4項目からなる The Global Assessment of Internet Trolling（GAIT）に Sest & March（2017）が4項目を加え、さらに GAIT の項目を修正して開発した The Global Assessment of Internet Trolling Revised（GAIT-R）の日本語版として開発された尺度である。「私の投稿やコメントが攻撃的だと思う人もいるが、私は面白いと思う」や「私は、インターネット上でのいざこざやトラブルを起こしたくない」などの項目からなり、増井ら（2019）により一因子性が確認されている。小倉・藤本（2019）の LINE 利用に関する不合理な信念尺度は、「即時性への囚われ」、「メッセージへの過敏さ」、「過度の同調性」の3つの下位尺度からなる尺度である。

上記に加え、川浦ら（2005）の mixi における経験と行動、北上ら（2015）のテクノ依存傾向、宮戸・小玉（2017）のインターネット依存傾向尺度、諸井・木ノ下（2021）の SNS における居場所感覚尺度、二宮（2017）の Twitter 上の自己呈示尺度、西村・遠藤（2009）の尺度を改変した澤井・福岡（2018）インターネット利用動機などの尺度項目についても参照し、検討を行った。以上の手続きにより選択され、修正された72項目を表1に示した。

手続き

大学教員が担当する、高校生向けの心理学系講

表1 本研究で使用された項目 (SNS使用態度)

項目	文献	下位尺度名	表示順
SNS上では、他人の悪口を言いやすい	藤・吉田(2009)	攻撃的言動	63
SNS上には、自分の居場所があると感じられる	藤・吉田(2009)	所属感獲得	14
SNSを利用すると、日常生活でのストレスを解消できる	藤・吉田(2009)	非日常的関与	49
嫌なことがあると、周りの人がどう思うかは気にせずSNSに投稿する	藤井・山本・伊藤(2013)	自己アピール	32
嬉しいことがあると、多少自慢のように見えることでもSNSに投稿する	藤井・山本・伊藤(2013)	自己アピール	38
暇があればSNSの書き込みをする	濱口・金子(2021)	CAS	11
否定的な内容を投稿することが多いSNSアカウント(いわゆる裏アカウント)を利用している	濱口・金子(2021)	CAS	18
SNSでは、感情にまかせて衝動的に投稿やコメントをしないよう注意している	濱口・金子(2021)	CAS	53
自分を目立たせようと、誇張した内容をSNSに投稿する	濱口・金子(2021)	CAS	59
SNSでの投稿やコメントに「むかつく」、「うざい」のような、きつい言葉を用いる	濱口・金子(2021)	怒りの発信	35
腹が立った出来事があると、そのことへの怒りや不満をSNSに投稿する	濱口・金子(2021)	怒りの発信	36
SNSを利用できない状態が続いても不安にならない	菱山(2009)	インターネット依存傾向尺度	9
SNS接続を終了してから数分後、必要もないのに再び接続する	菱山(2009)	インターネット依存傾向尺度	56
家族・友人・知人とコミュニケーションをとるためにSNSを利用する	黄ら(2017)	現実生活の通信道具として	37
SNSに、私を乱すような投稿やコメントはない	石川(2019)	慎重性	70
家族・友人・知人との関係を維持するためにSNSを利用する	柏原(2011)	既存関係維持動機	34
良い意味で自分が目立つためにSNSを利用する	柏原(2011)	自己表示動機	17
一人の時間ができたら、すぐにSNSにアクセスする	久保・坂田・清水(2015)	過度の利用	10
人と話しながらでも、SNSを利用する	久保・坂田・清水(2015)	過度の利用	50
自分が送った文章の量よりも、相手から返信される文章の量が少なく不安になる	久保・坂田・清水(2015)	情緒的利用	4
SNSでは、相手の投稿やコメントが本当の気持ちなのかかわからず不安になる	久保・坂田・清水(2015)	情緒的利用	45
SNSでのやり取りで、相手からの返信が遅いとイライラする	黒川・本庄・三島(2020)	情緒	27
時間を忘れてSNSの投稿を見続ける	小坂(2016)	SNS閲覧	65
SNSで本音を投稿すると、他人から嫌われるのではないかと思う	前田(2021)	自己抑制	52
SNSでは気軽に本音が言える	前田(2021)	自己抑制	71
SNSで誹謗や中傷の投稿が目に入ると気が滅入る	前田(2021)	情緒不安定	68
SNSで他人の日常に関する投稿を見て嫉妬する	前田(2021)	劣等感	19
SNSで他人の日常に関する投稿から、自分の日常と他人の日常とを比較する	前田(2021)	劣等感	54
SNSで他人の投稿を見ると劣等感を感じる	前田(2021)	劣等感	61
SNSでの私の投稿やコメントが攻撃的だと思ふ人もいるが、私はおもしろいと思ふ	増井・田村・マーチ(2019)	日本語版ネット荒らし尺度	22
おもしろいので、物議をかもすようなネタをSNS上で共有したり、送ったりする	増井・田村・マーチ(2019)	日本語版ネット荒らし尺度	66
SNS上でのいざこざやトラブルを起こしたくない	増井・田村・マーチ(2019)	日本語版ネット荒らし尺度	67
日常の出来事、ついSNSで発信したくなる	松島ら(2017)	日常への侵入性	2
自分の投稿やコメントへの反応が気になり、何度もSNSを開く	松島ら(2017)	日常への侵入性	40
SNSを使っていると、他人に常に縛られている気がする	松浦ら(2020)	SNSの束縛感・不快感	28
大したことはない用事でも、SNSだと気軽にやり取りができる	松浦ら(2020)	SNSの利便性	51
現実の家族・友人・知人とSNS上でつながっていることに窮屈さを感じる	森・名取・小崎(2014)	ネガティブ感情	60
SNSで他人のネガティブな投稿を見ると気が滅入る	森・名取・小崎(2014)	ネガティブ感情	62
SNSによって、自分の行動が他人に常に見張られている気がする	西村(2017)	LINEの効用認知尺度	5
SNSでのやり取りは気を遣う	西村(2017)	LINEの効用認知尺度	39
SNS上で開示した自分自身についての情報が不正利用される可能性がある	西村(2017)	インターネットにおけるプライバシー懸念尺度	13
SNSでは、体調が悪いことをアピールする	能仁・村上・宇都宮(2022)	アピール・反応への囚われ	26
SNSでは、忙しいことをアピールする	能仁・村上・宇都宮(2022)	アピール・反応への囚われ	44
世の中の出来事に関する他人の意見を知るためにSNSを利用する	能仁・村上・宇都宮(2022)	知識やアイデアの獲得	64
SNSで不快な投稿を見ても、何事もなかったように別の話題を投稿する	能仁・村上・宇都宮(2022)	投稿	7
SNSでの自分の投稿が未読のままだと、相手に嫌われていると思う	小倉・藤本(2019)	メッセージへの過敏さ	20
SNSでみんながやり取りしているなか、自分だけ抜けるのはよくない	小倉・藤本(2019)	過度の同調性	3
自分からSNSでのやり取りを終えるのは相手に失礼だ	小倉・藤本(2019)	過度の同調性	42
SNSでは、相手から返信が来なくなるまでやり取りを続けたいといけな	小倉・藤本(2019)	即時性への囚われ	21
愚痴を言うためにSNSを利用する	大野(2019)	愚痴・相談	1
事務的な連絡のためにSNSを利用する	大野(2019)	日常の関係維持	23
他人から注目されるためにSNSを利用する	大野(2019)	優越感・評価の獲得	8
いいねなどの評価やコメントをもらうためにSNSを利用する	大野(2019)	優越感・評価の獲得	30
現実の生活が充実していることを自慢するために、SNSを利用する	大野(2019)	優越感・評価の獲得	33
SNS上の情報を見ておかないと、話題についていけない	岡本(2017)	閲覧強迫	6
SNSでの投稿に、すぐ返信しなければ相手に嫌われるのではないかと不安になる	岡本(2017)	閲覧強迫	46
SNSで常に人とつながっている気がして疲れる	岡本(2017)	過剰な繋がり	55
SNSを見ていて、他人が自分よりも幸せそうだと感じる	岡本(2017)	社会的比較	15
SNSへの投稿は、誰にチェックされているのか分からなくて不安になる	岡本(2017)	情報拡散不安	31
SNSへの投稿が、見てほしくない以外にも見られてしまうのが嫌だ	岡本(2017)	情報拡散不安	69
SNSに書き込むと、自分の行動を人に把握される気がして気持ちが悪い	岡本(2017)	情報拡散不安	72
朝起きるとすぐにSNSにアクセスする	岡安(2017)	インターネット利用行動	16
食事をしながらSNSを利用する	岡安(2017)	インターネット利用行動	29
SNSでは、面と向かって話にくく相手ともやり取りしやすい	申・湖村(2019)	SNSの使用認知	12
他にしなければならぬことがあっても、ついSNSを見てしまう	申・湖村(2019)	SNS依存	43
SNS上では、いつもテンションが高いように心がけている	高橋・伊藤(2016)	表現法配慮	48
SNSでは、自分の投稿に既読がついたかを何度も確認する	高橋・伊藤(2016)	敏感反応	57
反応が悪かったSNSの投稿については、投稿したことをずっと後悔する	都築ら(2019)	SNSの投稿についての態度	25
反応がよかったSNSの投稿について、何度も読み返す	都築ら(2019)	SNSの投稿についての態度	47
SNSで相手からの返信が来ないと不安になる	鶴田・山本・野嶋(2014)	メール不安	24
SNS以外、特に趣味がない	戸田・西尾・竹下(2015)	ネットコミュニケーションへの没頭	41
現実から逃避するためにSNSを利用する	戸田・西尾・竹下(2015)	ネットコミュニケーションへの没頭	58

義の講義時間中あるいは大学や大学院における心理学系講義の講義時間中に質問紙が配付され、調査対象者は集団で質問紙調査に参加した。質問紙には、「これは、あなたの SNS (Twitter, Instagram, LINE 等) の利用状況や考え方について尋ねるものです。次の質問に対して、「全くあてはまらない (1)」から、「よくあてはまる (5)」のうち、最も自分にあてはまるものを 1 つだけ選んで○をつけてください。」との教示がなされ、5 件法の選択肢のいずれかに○をつけることが調査対象者に求められた。調査対象者には個人のペースでこれらへの回答を進めることが求められた。

倫理的配慮

調査の実施に際しては、その結果が統計的に処理され、個人の結果が問題とされないこと、結果は研究の目的以外に使用されないこと、参加は自由意志によるものであり、いつでも質問への回答を辞められることをフェイスシートに記載し、周知した。これらの記載事項に同意する場合にのみ、調査に参加することが求められた。

Ⅲ 結果と考察

SNS 使用態度尺度の因子分析

本研究で使用された 72 項目に対して、最尤法、Promax 回転による因子分析を行った。因子の解釈可能性を判断し、10 因子解が妥当と考え、項目や因子の解釈可能性や、どの因子にも因子負荷量が $|.35|$ 未満であることや、複数の因子に対して因子負荷量が $|.35|$ 以上であることを考慮して、項目の削除を行った上で因子分析を繰り返す、最終的に 53 項目からなる 10 因子解を採択した。この因子分析表を表 2 に示す。

第一因子は、「腹が立った出来事があると、そのことへの怒りや不満を SNS に投稿する」や「SNS では、体調が悪いことをアピールする」など、ネガティブな感情や経験を SNS 上に投稿することに関する項目に負荷量が高く、ネガティブな内容・感情を SNS で表出する態度として「ネガティブ表出」と命名された。

第二因子は、「他にしなければならないことが

あっても、つい SNS を見てしまう」や「時間を忘れて SNS の投稿を見続ける」など、SNS を頻繁に見る、あるいは長時間閲覧することに関する項目に負荷量が高く、SNS に対して依存的な態度として「依存的使用」と命名された。

第三因子は、「SNS で他人の日常に関する投稿を見て嫉妬する」や「SNS で他人の投稿を見ると劣等感を感じる」など、SNS 上の他者の投稿を見ることで、自分や自分の経験に対してネガティブな感情をもつことに関する項目に負荷量が高く、SNS 上の他者との比較によりネガティブになる態度として「対比ネガティブ」と命名された。

第四因子は、「他人から注目されるために SNS を利用する」や「現実の生活が充実していることを自慢するために、SNS を利用する」など、SNS 上での投稿により、自分が評価されることに関する項目に負荷量が高く、SNS 上での賞賛されることを求める態度として「賞賛希求」と命名された。

第五因子は、「SNS では、自分の投稿に既読がついたかを何度も確認する」や「SNS での投稿に、すぐ返信しなければ相手に嫌われるのではないかと不安になる」など、SNS 上での自分の投稿に対して、ネガティブなフィードバックが与えられることに対する不安に関する項目に負荷量が高く、SNS 上での批判等を心配する態度として「拒否不安」と命名された。

第六因子は、「SNS で常に人とつながっている気がして疲れる」や「SNS に書き込むと、自分の行動を人に把握される気がして気持ちが悪い」など、SNS 上で自分の情報が開示されていることに対してネガティブな感情をもつことに関する項目に負荷量が高く、SNS 上での暴露に対して不安を感じる態度として「暴露不安」と命名された。

第七因子は、「大したことのない用事でも、SNS だと気軽にやり取りができる」、「SNS では、面と向かって話しにくい相手ともやり取りしやすい」の 2 項目に負荷量が高く、SNS 上でのやり取りのハードルの低さを感じる態度として「ハードル

表2 SNS使用態度尺度の因子分析結果(最尤法, Promax 回転)

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X
第1因子: ネガティブ表出 ($\alpha = .864$) ($M = 1.81, SD = 0.74$)										
腹が立った出来事があると、そのことへの怒りや不満をSNSに投稿する	.847	.000	.050	-.027	-.014	-.073	.087	-.107	-.177	-.028
愚痴を言うためにSNSを利用する	.804	-.035	.032	-.002	-.051	.063	-.089	.001	-.076	-.021
嫌なことがあると、周りの人がどう思うかは気にせずSNSに投稿する	.746	.029	-.056	.076	-.064	.004	-.059	.078	-.072	-.088
SNS上では、他人の悪口を言いやすい	.712	-.046	.017	-.137	.024	-.020	.094	-.072	.222	.074
SNSでは、体調が悪いことをアピールする	.690	-.054	-.106	.096	.077	-.013	-.047	.102	-.135	-.015
SNSでの投稿やコメントに「むかつく」、「うざい」のような、きつい言葉を用いる	.680	.055	-.176	-.083	.154	.087	.056	-.096	.142	.112
否定的な内容を投稿することが多いSNSアカウント(いわゆる裏アカウント)を利用している	.477	.156	.170	.060	-.164	.052	-.058	-.047	.211	.011
SNSでは、感情にまかせて衝動的に投稿やコメントをしないよう注意している	-.414	.122	-.146	.327	-.006	.139	.145	.031	-.187	.109
SNSでは、忙しいことをアピールする	.413	-.144	.020	.202	.034	.072	.186	.146	-.051	.047
自分を自立たせようと、誇張した内容をSNSに投稿する	.392	-.010	.008	.267	.022	.018	.118	.079	.050	.024
現実から逃避するためにSNSを利用する	.379	.258	.122	-.059	.084	.112	.112	-.074	-.234	-.158
第2因子: 依存的使用 ($\alpha = .869$) ($M = 3.39, SD = 1.08$)										
他にしなければならぬことがあっても、ついSNSを見てしまう	-.181	.864	.057	.002	.006	-.047	.047	.119	-.062	-.082
時間を忘れてSNSの投稿を見続ける	.050	.827	.034	-.082	-.083	-.049	.087	.115	-.004	-.105
SNS接続を終了してから数分後にも、必要もないのに再び接続する	-.027	.769	-.050	-.042	.172	-.043	.022	.017	.080	.115
一人の時間ができたら、すぐにSNSにアクセスする	.025	.714	-.086	.038	-.001	-.063	-.010	-.066	-.048	-.026
朝起きるとすぐにSNSにアクセスする	.075	.702	.025	.073	.079	-.039	-.124	-.213	-.077	.060
SNSを利用できない状態が続いても不安にならない	-.221	-.425	-.130	.033	.067	.154	.051	-.197	.037	-.085
第3因子: 対比ネガティブ ($\alpha = .873$) ($M = 2.45, SD = 1.07$)										
SNSで他人の日常に関する投稿を見て嫉妬する	.025	.016	.974	.013	-.101	-.102	-.153	.038	.039	.054
SNSで他人の投稿を見ると劣等感を感じる	-.055	.023	.811	-.074	.043	.018	.046	.002	-.014	.021
SNSを見てると、他人が自分よりも幸せそうだと感じる	.064	.004	.667	.181	-.070	.065	-.059	-.049	-.101	.050
SNSで他人の日常に関する投稿から、自分の日常と他人の日常とを比較する	-.152	.097	.645	-.101	.230	.136	.125	-.162	.013	-.015
反応が悪かったSNSの投稿については、投稿したことをずっと後悔する	.069	-.143	.492	.076	.074	.064	-.068	.274	.053	.000
第4因子: 賞賛希求 ($\alpha = .818$) ($M = 2.14, SD = 0.90$)										
他人から注目されるためにSNSを利用する	.046	-.061	.002	.904	.059	-.031	-.133	.020	-.043	.019
いいなどの評価やコメントをもらうためにSNSを利用する	.012	-.067	-.028	.631	.137	-.066	.202	.137	-.079	-.080
良い意味で自分が自立たためSNSを利用する	.158	.018	.070	.575	.069	-.035	.038	-.120	.079	-.011
日常の出来事、ついSNSで発信したくなる	.176	.229	.044	.467	-.204	-.185	.125	-.054	-.109	-.045
現実の生活が充実していることを自慢するために、SNSを利用する	.036	.210	.115	.389	-.061	.197	-.010	-.085	.313	.032
第5因子: 拒否不安 ($\alpha = .833$) ($M = 2.29, SD = 0.97$)										
SNSでは、自分の投稿に既読がついたかを何度も確認する	-.004	.111	-.044	.015	.846	-.047	.066	-.165	-.019	-.084
反応がよかったSNSの投稿について、何度も読み返す	.100	-.056	-.019	.244	.614	.006	.131	.016	.072	-.042
SNSでの投稿に、すぐ返信しなければ相手に嫌われるのではないかと不安になる	-.043	-.055	.158	-.097	.479	.053	.082	.276	.048	.031
SNSでの自分の投稿が未読のままだと、相手に嫌われていると思う	-.047	-.090	.255	.076	.463	-.010	-.037	.138	.015	-.018
自分の投稿やコメントへの反応が気になり、何度もSNSを開く	-.056	.141	.057	.310	.454	-.019	.009	.030	.003	.054
SNSでは、相手の投稿やコメントが本当の気持ちなのかかわからず不安になる	.203	.060	-.031	-.131	.363	.265	-.030	.171	-.123	-.040
第6因子: 暴露不安 ($\alpha = .832$) ($M = 2.37, SD = 0.91$)										
SNSで常に人となつがっている気がして疲れる	.035	-.097	-.001	.038	-.065	.843	-.119	.041	-.081	.032
現実の家族・友人・知人とSNS上でつながっていることに窮屈さを感じる	.218	-.156	-.145	.073	-.041	.713	.032	-.035	-.081	.023
SNSに書き込むと、自分の行動を人に把握される気がして気持ちが悪い	-.114	-.024	.013	-.098	.068	.698	.029	-.054	-.047	-.031
SNSによって、自分の行動が他人に常に見られている気がする	-.024	.228	-.095	.171	.061	.682	-.334	-.029	.064	-.009
SNSを使っていると、他人に常に見られている気がする	.014	-.070	.158	-.009	.049	.672	-.239	-.143	.000	.040
SNSへの投稿は、誰にチェックされているのかわからないので不安になる	-.087	-.137	.041	-.182	-.042	.625	.115	.071	.047	-.031
SNSへの投稿が、見てほしい人以外にも見られてしまうのが嫌だ	.040	.024	.051	-.090	-.154	.460	.207	-.007	-.233	.042
第7因子: ハードルの低さ ($\alpha = .682$) ($M = 3.38, SD = 1.13$)										
大したことのない用事でも、SNSだと気軽にやり取りができる	.000	.130	-.127	-.008	.108	-.066	.638	-.107	-.035	.240
SNSでは、面と向かって話しにくい相手ともやり取りしやすい	.186	-.077	.015	.071	.078	-.121	.465	-.088	-.036	.067
第8因子: 継続義務感 ($\alpha = .656$) ($M = 2.27, SD = 0.90$)										
自分からSNSでのやり取りを終えるのは相手に失礼だ	.051	-.031	-.045	-.006	-.067	-.002	-.113	.843	-.020	.068
SNSでは、相手から返信が来なくなるまでやり取りを続けたいといけない	-.096	.076	.053	.048	-.027	-.083	-.030	.705	.088	-.097
SNSでみんながやり取りしているが、自分だけ抜けるのはよくない	.083	.236	.003	-.001	.095	-.020	-.108	.384	.043	.150
第9因子: 炎上容認 ($\alpha = .567$) ($M = 2.16, SD = 0.74$)										
SNSで誹謗や中傷の投稿が目に入ると気が滅入る	.110	.167	-.033	-.035	-.011	.131	-.069	.136	-.718	.075
SNSで他人のネガティブな投稿を見ると気が滅入る	-.154	.099	.114	.037	.023	.341	.152	-.048	-.459	-.044
SNSでの私の投稿やコメントが攻撃的だと思う人もいるが、私はおもしろいと思う	.073	.026	-.016	.161	-.126	.249	.248	.147	.402	-.101
SNS上でいざこざやトラブルを起こしたくない	.052	-.043	-.005	.067	-.020	.066	.120	-.146	-.369	-.012
おもしろいので、物議をかもしようとするネタをSNS上で共有したり、送ったりする	.164	.296	-.093	-.161	.064	.035	.108	.078	.351	-.042
第10因子: 情報共有 ($\alpha = .593$) ($M = 3.81, SD = 0.92$)										
家族・友人・知人とコミュニケーションをとるためにSNSを利用する	-.092	.046	-.040	.036	-.181	.075	.201	.110	-.041	.842
家族・友人・知人との関係を維持するためにSNSを利用する	.113	.035	.142	-.185	-.015	.049	.178	-.060	-.006	.554
事務的な連絡のためにSNSを利用する	.011	-.241	.122	.157	.121	-.157	.041	-.102	-.092	.376
因子間相関										
I	—									
II	.512	—								
III	.301	.366	—							
IV	.527	.487	.420	—						
V	.313	.364	.609	.387	—					
VI	.117	.179	.526	.044	.464	—				
VII	.362	.390	.284	.286	.140	.129	—			
VIII	.089	.091	.317	.144	.420	.345	.170	—		
IX	.271	.076	-.136	.132	-.115	-.109	.042	-.060	—	
X	.130	.240	.149	.148	.217	.085	-.002	.080	-.051	—

の低さ」と命名された。

第八因子は、「自分から SNS でのやり取りを終えるのは相手に失礼だ」や「SNS でみんながやり取りしているなか、自分だけ抜けるのはよくない」など、SNS 上でのやり取りを継続していかないといけないと考えることに関する項目に負荷量が高く、SNS 上でのやり取りの継続を義務と感じる態度として「継続義務感」と命名された。

第九因子は、「SNS で誹謗や中傷の投稿が目に入ると気が滅入る (逆転)」や「SNS での私の投稿やコメントが攻撃的だと思う人もいるが、私はおもしろいと思う」など、SNS 上でのトラブルをあまりネガティブと捉えないことに関する項目に負荷量が高く、SNS 上でのトラブルを容認する態度として「炎上容認」と命名された。

第十因子は、「家族・友人・知人とコミュニケーションをとるために SNS を利用する」や「事務的な連絡のために SNS を利用する」など、SNS を日常的な連絡手段として使用することに関する項目に負荷量が高く、SNS 上でのやり取りは情報のやり取りであるとする態度として「情報共有」と命名された。

第一因子 (ネガティブ表出) に対して負荷量が 35 以上の 11 項目の平均得点を調査対象者ごとに算出し、これをネガティブ表出得点とした。同様の手続きで、依存的使用得点、対比ネガティブ得点、賞賛希求得点、拒否不安得点、暴露不安得点、ハードルの低さ得点、継続義務感得点、炎上容認得点、情報共有得点を調査対象者ごとに算出した。それぞれの下位尺度得点の平均値および標準偏差は、表 2 に示した。

また、これらの下位尺度の信頼性について検討するため、 α 係数を算出した (表 2)。その結果、炎上容認については、 $\alpha = .567$ 、情報共有については、 $\alpha = .593$ と、やや低い値であるものの、それ以外の尺度については、いずれも .650 以上の α 係数を示した。

本研究では、高校生、大学生、大学院生を対象として、SNS 使用態度尺度を構成することを目的とした。因子分析の結果、「ネガティブ表出」、

「依存的使用」、「対比ネガティブ」、「賞賛希求」、「拒否不安」、「暴露不安」、「ハードルの低さ」、「継続義務感」、「炎上容認」、「情報共有」の 10 因子が抽出された。すべての因子の信頼性が十分であるとは言えないが、多くの因子の信頼性は比較的高いことが示された。紙面の都合上、尺度の仔細な特性については議論できていないが、続報にて、本研究の分析結果を吟味していくこととする。

文献

- Buckels, E. E., Trapnell, P. D., & Paulhus, D. L. (2014). Trolls just want to have fun. *Personality and Individual Differences*, *67*, 97–102.
- 藤桂・吉田富二雄 (2009). インターネット上での行動内容が社会性・攻撃性に及ぼす影響：ウェブログ・オンラインゲームの検討より. *社会心理学研究*, *25*, 121–132.
- 藤井勉・山本政人・伊藤忠弘 (2013). Twitter における不適応的な「つぶやき」の要因：パーソナリティ特性からの検討. *学習院大学計算機センター年報*, *34*, 40–55.
- 藤井勇仁 (2021). Instagram の使用方法が幸福度に及ぼす影響についての検討. *初等教育論集*, *22*, 122–133.
- Griffiths, M. (2005). A ‘components’ model of addiction within a biopsychosocial framework. *Journal of Substance Use*, *10*, 191–197.
- 濱口佳和・金子楓 (2021). サイバー・アグレッション尺度の作成及びその心理的ストレス反応との関連の検討. *筑波大学心理学研究*, *59*, 25–35.
- 橋本かりん・山田智之 (2020). SNS の利用態度が大学生のインターネット依存及び自信に与える影響. *上越教育大学研究紀要*, *39*, 417–425.
- 平木蒼佳・宮崎圭子 (2020). 女子大生の LINE 利用時の行動及び孤独感が友人関係に及ぼす影響について. *跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要*, *17*, 163–173.
- 菱山和亮 (2009). 項目反応理論を用いたインター

- ネット依存傾向尺度の検討. 日本パーソナリティ心理学第18会大会発表論文集, 64-65.
- 黄正国・内野悌司・磯部典子・二本松美里・岡本百合・三宅典恵・永澤一恵・矢式寿子・池田龍也・吉原正治 (2017). 大学生のソーシャルメディアの利用時間と心理的要因との関連. 総合保健科学: 広島大学保健管理センター研究論文集, 33, 17-24.
- 五十嵐祐・吉田俊和 (2003). 大学新入生の携帯メール利用が入学後の孤独感に与える影響. 心理学研究, 74, 379-385.
- 石川真 (2019). ネット上のコミュニケーション行動における現実と理想の差異. 上越教育大学研究紀要, 38, 217-226.
- 柏原勤 (2011). Twitter の利用動機と利用頻度の関連性: 「利用と満足」研究アプローチからの検討. 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要: 社会学心理学教育学: 人間と社会の探究, 72, 89-107.
- 川原正人 (2020). 大学生における居場所感とアパシー傾向がネット依存傾向にもたらす影響. 東京未来大学研究紀要, 14, 37-44.
- 川浦康至・坂田正樹・松田光恵 (2005). ソーシャルネットワークワーキング・サービスの利用に関する調査: mixi ユーザの意識と行動. コミュニケーション科学, 23, 91-110.
- 北上大樹・坂部創一・山崎秀夫 (2015). 情報環境におけるインターネット利用と心理的レジリエンスとの関係性. 第29回環境情報科学学術研究論文発表会論文集, 309-314.
- 小坂守孝 (2016). 大学生における「過度のインターネット利用」の測定に関する一考察. 北翔大学教育文化学部研究紀要, 1, 55-63.
- 久保昌平・坂田桐子・清水裕士 (2015). 青年におけるアイデンティティ確立とSNSの利用および依存との因果関係の検討. 広島大学大学院総合科学研究科紀要I人間科学研究, 10, 9-16.
- 國吉真弥 (2017). 自己呈示に関連する諸要因が集団場面における粗暴行為に及ぼす影響——自己呈示行動としての非行(3). 犯罪心理学研究, 55, 1-14.
- 黒川雅幸・本庄勝・三島浩路 (2020). 高校生・高専生用スマートフォン利用によるインターネット依存傾向尺度の作成. 実験社会心理学研究, 60, 37-49.
- 黒澤泰・田口垂美 (2020). インスタグラム利用に関連する感情と人生満足度の関連: 大学生を対象として. 茨城キリスト教大学紀要 II. 社会・自然科学, 54, 191-201.
- Lee, J., Abell, N., & Holmes, J. (2015). Validation of measures of cyberbullying perpetration and victimization in emerging adulthood. *Research on Social Work Practice*, 27, 456-467.
- 前田彩花 (2021). SNS 疲れによって引き起こされるネガティブ感情について. 甲南女子大学大学院論集, 19, 37-48.
- 正木大貴 (2018). 承認欲求についての心理学的考察: 現代の若者と SNS との関連から. 現代社会研究科論集: 京都女子大学大学院現代社会研究科紀要, 12, 25-44.
- 正木大貴 (2019). SNS は人間関係を変えたのか? 現代社会研究科論集: 京都女子大学大学院現代社会研究科紀要, 13, 123-136.
- 増井啓太・田村紋女・マーチ, エヴィータ (2019). 日本語版ネット荒らし尺度の作成. 心理学研究, 89, 602-610.
- 松島公望・石川亮太郎・林明明・橋本和幸・毛利伊吹・中村裕子・石垣琢磨・宮下一博 (2017). 大学生版スマートフォン依存傾向尺度作成の試み. 千葉大学教育学部研究紀要, 66, 283-291.
- 松浦彰護・坂東美知代・佐藤美央・中谷章子 (2020). 看護大学生の SNS 利用における対人コミュニケーションの特徴. 神奈川工科大学研究報告 A 人文社会科学編, 44, 9-15.
- 宮城妃菜・網内詩帆・萩彩乃・高木ルリ子・花田裕子・永江誠治 (2020). 看護大学生におけるインターネット依存傾向とインターネット利用状況との関連. 保健学研究, 33, 35-45.
- 宮代こずゑ (2019). 大学生の Twitter 利用に関

- する予備的調査：自己概念に着目して．宇都宮大学教育学部教育実践紀要，**6**，57-63.
- 宮戸悠貴・小玉正博 (2017)．中学生におけるインターネット依存と学校適応，精神的健康との関連．埼玉学園大学心理臨床研究，**3**，10-21.
- 森丈弓・名取洋典 (2018)．大学生向け能動的・受動的 SNS 疲れ尺度の作成．心理臨床学研究，**36**，409-418.
- 森丈弓・名取洋典・小崎茉貴 (2014)．SNS 疲れを測る (1) 受動的 SNS ストレスイベント尺度の作成．日本心理学会第 78 回大会発表論文集，61.
- 諸井克英・木ノ下晴菜 (2021)．女子大学生における居場所感覚の基底にある心理学的機制的探索 (VI)：日常の心理学的安寧感と SNS (social networking service) 世界における居場所感覚．同志社女子大学生生活科学，**54**，1-10.
- 諸井克英・岸沙耶香・米澤美幸・永野遙果 (2018)．女子大学生における居場所感覚の基底にある心理学的機制的探索 (IV)：SNS (social networking service) 世界における居場所感覚．総合文化研究所紀要，**35**，183-196.
- 二宮有輝 (2017)．大学生の精神的健康が SNS 依存傾向に与える影響について——SNS 上の自己呈示を媒介変数としたパス解析による検討．学校メンタルヘルス，**20**，37-47.
- 西村洋一 (2017)．LINE のプライバシー設定と利用行動の現状と関連する要因の検討．日本教育工学会論文誌，**40**，367-377.
- 西村洋一 (2020)．大学生の友人関係における LINE の利用：自己開示の深さおよび効用認知に着目して．聖学院大学論叢，**32** (第 2)，127-141.
- 西村洋一・遠藤健治 (2009)．高校生のインターネット利用状況についての基礎的検討——対人不安傾向，性別を要因とした分析．北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要，**2**，41-53.
- 能仁結衣・村上勝典・宇都宮真輝 (2022)．SNS 利用行動尺度作成の試み．岡山心理学会第 69 回大会発表論文集，27-28.
- 小倉正義・藤本優紀 (2019)．LINE 利用に関する不合理な信念尺度の作成の試み——大学生・大学院生を対象に．日本教育心理学会第 61 回総会発表論文集，325.
- 大野志郎 (2019)．SNS 依存および諸問題と利用動機との関係 逃避，優越感，共感によるリスクの比較．情報教育ジャーナル，**2**，10-17.
- 岡本卓也 (2017)．SNS ストレス尺度の作成と SNS 利用動機の違いによる SNS ストレス．信州大学人文科学論集，**4**，113-131.
- 岡安孝弘 (2016)．高校生のインターネット利用行動とインターネット依存，精神的健康の関係．明治大学心理社会学研究，**12**，17-30.
- Runions, C. K., Back, M., & Shaw, T. (2017)．Disentangling Functions of Online Aggression: The Cyber-Aggression Typology Questionnaire (CATQ). *Aggressive Behavior*, **43**, 74-84.
- 澤井智哉・福岡欣治 (2018)．大学生のインターネット利用動機とインターネット依存傾向の関係．川崎医療福祉学会誌，**28**，77-87.
- Sest, N. & March, E. (2017)．Constructing the cyber-troll: Psychopathy, sadism, and empathy. *Personality and Individual Differences*, **119**, 69-72.
- Shapka, D. J. & Maghsoudi, R. (2017)．Examining the validity and reliability of the cyber-aggression and cyber-victimization scale. *Computers in Human Behavior*, **69**, 10-17.
- 下田麻衣・笠置遊 (2021)．SNS における矛盾した自己呈示的メッセージが投稿者の印象に及ぼす影響．立正大学心理学研究所紀要，**19**，1-7.
- 申知元・潮村公弘 (2019)．SNS 利用態度と友人観の因果関係：SNS サービスの特徴の相違に着目した検討．多文化・共生コミュニケーション論叢，**14**，5-16.
- 須藤春佳 (2019)．女子大学生の友人関係と SNS コミュニケーションの特徴——気遣いと心理的居場所感に着目して．神戸女学院大学論集，

66, 63-77.

鈴木茜・矢吹剣一・後藤智香子・新雄太・吉村有司・小泉秀樹 (2022). サイバー空間・フィジカル空間に形成される人々の「居場所」の様相に関する研究「居場所」の特性および心理的側面に着目して. 都市計画論文集, **57**, 926-932.

高橋尚也・伊藤綾花 (2016). SNS 利用における青年の対人関係特性: Twitter と LINE 利用時の行動に注目した検討. 立正大学心理学研究所紀要, **14**, 39-50.

谷口淳一・清水裕士 (2017). 大学新入生の自己高揚的自己呈示が友人関係の形成と自尊心に及ぼす影響—— APIM を用いたペア縦断データの分析. 実験社会心理学研究, **56**, 175-186.

戸田雅裕・西尾信宏・竹下達也 (2015). 新しいスマートフォン依存尺度の開発. 日本衛生学雑誌, **70**, 259-263.

鶴田利郎・山本裕子・野嶋栄一郎 (2014). 高校生向けインターネット依存傾向測定尺度の開発. 日本教育工学会論文誌, **37**, 491-504.

都筑学・宮崎伸一・村井剛・早川みどり・飯村周平 (2019). 大学生における SNS 利用とその心理に関する研究—— LINE, Twitter, Instagram, Facebook の比較を通じて. 中央大学保健体育研究所紀要, **37**, 7-33.